

『新潟県満州開拓史』を自費出版して

高橋 健 男

1 人を弔う

人はその人生を全うしたとき、名を刻して弔われる。手厚く葬られて墓所に入り、法要が重ねられる中で、愛する人・親族・関係者の心の中に生き続ける。これが世の常である。

しかし、戦争の時代には、おびただしい数の弔うことがかなわない「異常」や「非常」があった。死地さえ分からない。「西太平洋にて」の兵士の死亡公報は、愛する人に死者がどこに眠っているかを伝えることはない。長かるべき生身の“生”を無残に断ち切れ、人間一代の歴史を未完のまま抹殺されたその人の“生”を、詳しく知る術はない。

「弔う」とは、その場におもむき死者を見舞うことであるという。突然の死を迎えた人たちに対し、東南アジア、南方諸島やシベリアの奥地に少しく墓地や慰霊の碑があるという。遺骨収集団が訪れ、少なくない遺骨が拾い集められ弔われている。

ひるがえって満州開拓民殉難者について見ると、戦後日中間で「遺骨の収集は行わない」との申し合わせがなされたように聞く。そういえば「方正地区日本人公墓」に収容された遺骨は、方正県人民政府の手によって収集された（奥村正雄『天を恨み地を呪いました』等参照）。「麻山地区日本人公墓」にも、関係者の強い願いから慰霊・遺骨収集団が組まれ遺骨収集がなされたが、主だった遺骨は収集団が拾い集める前に、これも黒龍江省か現地の人民政府の手によって収集され、方正に墓も建っていたという。収集団は麻山谷に残る遺骨を探して拾い、そして公墓に収めたいらしい（中村雪子『麻山事件』、団史『麻山の夕日に心あそばさず』、『昭和57年年度哈達河会報』等参照）。

新京（現・長春）や奉天（現・瀋陽）の都市部まで避難し、それぞれの収容所で没した人たちは、収容所脇の空き地や公園の大きな穴に次々と運ばれたと、多くの手記にある。拙著出版後、「新京の収容所の位置が分からないか」とか、「身内が新香房で亡くなったというが、現地はどこで、今どうなっているか」など、関係者からの問い合わせが続いた。しかし、場所の特定はかなわない。西本願寺とか白菊小学校・室町小学校とか緑園地区とか、収容所の名前さえも分からないのである。

新香房は今の広大な農地のどこかに葬られていたのであろう。多々あった日本人墓地は戦後中国の都市化・開発によってビルの下であったり道路であったり、土地改良で造成された農地のどこかであったりする。いずれも墓標さえないかつての日本人墓地なのだが、そこは人を弔う場とはなっていない。

「弔う」とは「とぶら（訪）らう」こと、すなわち「問う」こと、「問い訪ねる」ことといわれる。「使者の枕辺に寄り添い、親しくその人の名を呼び、その声を聴く」ことであるという（村山常雄『シベリアに逝きし46300名を刻む』）。その意味で「方正地区日本人公墓」「中日友好園林」は、特に開拓団関係者にとって特異な存在である。

2 名を刻す

ある日、渡満家族（叔母夫妻）の養子となった弟二人の消息を求めて、ある老人が自宅を訪れた。戦後65年にして、何が何でも現地慰霊に出向きたいという。だが、その老人は叔母一家が加わった開拓団の名称も、弟たちがどこでどのように亡くなったのかも分からない。唯一の頼りは戸籍に記された一行の死亡証明だった。

その一行を見せてもらって驚いた。「麻山にて死亡」と記されている。老人はいつか「自決した」との話の聞いていた。二人の弟は麻山事件での死亡者である。哈達河開拓団には新潟県から20ないし21家族が入植していた。哈達河開拓団新潟部落についてはその概要、逃避行経路、麻山での自決などの詳細を私は承知しており、拙著にも記録済みであった。老人に地図を示しながら、第二人、昭和8年と10年生まれの正平、元也が養子となった東松治・キニ家族の最後に共に思いをはせた。

東家は一家して麻山の避難集団の中にいた。叔父は麻山の決死隊のひとりだった。新潟県庁に残る開拓団員名簿を調べる。叔母・キニの名があり、「麻山にて自決」と朱書きがあった。ところが、夫の名も、消息を知りたい第二人の名もそこにはなかった。「麻山地区日本人公墓」に収められた遺骨は400体を越すが、たぶんそこにも個人名は記録されていないのではないかと。弟の消息を求めていた小出公司さん（新潟市）は今秋、一人で哈達河と麻山、そして方正の地に立った。戦後65年にして念願がなかった。

元日本軍兵士の中には「無名戦士の墓」に眠る人も多い。死者ひとりひとりが“無名”であるはずがない。人は必ず名を持ち、その「名前のうしろには人生があり、個性があり、悲しみや痛みがある」（浅田次郎『終わらざる夏』）。それなのに、誰によってもその人の名が刻されていない。

シベリア抑留死亡者4万6千人強の名を刻した村山常雄さん（糸魚川市）は、自身も4年間のシベリア抑留体験者である。ロシアから返還された抑留者名簿には、名前がカタカナ表記の上に、ロシア人の耳に響いた日本語は実名とは異なる表記に、あるいは同一人物名が重複して見出された。旧厚生省もその個人名を整理していない。村山常雄さんは10年に及ぶ調査で、知りえたすべてのシベリア抑留死亡者の個人名を漢字に直し、その名を刻した。しかしなお、約1万人の死者については何の情報も得られないという。

旧満州への慰霊の旅に二度同行させてもらった吉泉昭雄さん（横浜市、羽田澄子監督の「嗚呼満蒙開拓団」に登場）は、方正で妹二人を失った。依蘭付近の馬太屯開拓団からいっしょに方正まで避難していた吉泉昭雄さん（当時17歳）は、そこに名は刻されていないかもしれないが、妹の没した地、没した様子は克明に覚えている。だから、その地で深く、静かに慰霊する吉泉昭雄さんの姿に接する。一方、小出公司さんのように亡くなった弟の名を刻した文書すら見出すことのできない人もいる。

各県で慰霊祭が営まれているが、満州開拓民殉難者名簿が整えられてこなかった理由は何であろうか？そしてそれは誰の手によってなされるべきだったのだろうか？

3 伝え残す

死者の名も刻されず、その人がどのような死を迎えたのかも分からない状況は、一人の人間の“生”を、“死”を、あたかもなかったような状況にしてしまう。家族の心にはいつまでも残るが、公的には抹殺されているかのようである。

満州開拓団個々の入植地での様子、避難と殉難の様子についても同じことが言える。新潟県には残念ながら、県人開拓団全体を記録したものが戦後65年の間、編纂されることがなかった。いろいろ理由はあったのだが、新潟県は全国約半数の『〇〇県満州開拓史』がない県のひとつとなっていた（全国各県での編纂状況については『星火方正』第7号参照）。

そんな中、数年前に私は新潟県が送り出した全開拓団、全義勇隊の「実態調査表」ならびに開拓団員名簿を発見できた。作家の合田一道さんからは所持する「北満農民救済記録」

の中の新潟県開拓団記録をコピーしていただくことができた。これらにより『新潟県満州開拓史』の編纂が可能になった。

新潟県からは2戸、10数戸、あるいは20～50戸と参加した武装移民・試験移民期から第5次開拓団までが8開拓団(集団)、県単独編成の開拓団(集団・集合開拓団、分散・自由移民を含む)が第6次から第14次まで26開拓団、義勇隊は全国混成の第1次第2次に13中隊、県単独編成の第3次から第8次まで13中隊、合計60開拓団(集団)が渡満していた。その数約1万3,000人、全国第5位であった。

その全集団に関して関係者からの体験聴取を重ねた。県内外ならびに旧満州入植地等の関係地の調査に出向いた。記述の肉付けのためには欠かせない作業であったが、新潟県庁で「開拓団実態調査表」を閲覧・コピー入手する作業同様、編集終了までに足掛け6年の長い年月を要した。戦後65年の年にまとめ上げることができ、幸いに思う。8月9日、毎年、ソ連軍が満州に侵攻したこの日に行われる新潟県満州開拓民殉難者慰霊祭において、約5,000人の殉難の御霊に拙著を献納することができた。

拙著が新潟県において初の『満州開拓史』となったわけだが、その編集・執筆では以下の5点の特色を持たせた。

- ① 新潟県が送り出した満州開拓団・義勇隊開拓団(中隊)関係資料の発掘とその収録
- ② 各開拓団『団史』、関係者『手記』、戦後の親睦会の『会報』等の発掘とその活用
- ③ 関係者100余名を訪問しての体験談の聴取とその採録
- ④ 昭和20年までの地方紙記事の発掘とその参照
- ⑤ 開拓団殉難者慰霊碑の確認と碑文・写真の掲載
- ⑥ 満州開拓民引揚者の生活再建・戦後開拓の詳述

満州開拓団の記録は、その悲惨な逃避行ゆえにいわれる「引揚物」としてつづられることが多い。困苦・殉難は詳しく記録されるべきことであるが、開拓団入植から村づくり、生活の足跡も詳しく触れられるべきである。また、渡満を決意するにいたる当時の社会状況や各個人の事情も忘れてはならない。さらには、戦後帰りついた祖国・故郷でどのように迎えられたか、戦後新たに開拓に入った地での生活再建についても落とすことができない。それぞれがすべて生身の人の人生を語っているからである。

戦後開拓での生活再建は生やさしいものではなかった。緊急に斡旋された入植地が不良地であったり、1・2年であきらめなければならないような土地であったりした。不慣れがゆえの脱落者も出た。そこから海外への移住を選択した人もいた。一応の生活安定を得るまで、それらの人には30年、40年の月日が必要であった。満州開拓民を語るとき、その人の人生すべてをカバーする必要がある。

『新潟県満州開拓史』はB5版2段組、750ページの大部となった。現在の出版界事情からも内容が新潟県に特化したものであることから、自費出版とならざるを得ず、地元業者に依頼して完成した。著書は国会図書館ならびに近県県立図書館、新潟県内の各市町村中央図書館、大学図書館等に寄贈し、満州開拓団関係者ならびに関心をもつ人たちに読んでいただけるようにした。